

鹿児島県総合教育センター  
平成23年度長期研修研究報告書

研究主題

生徒一人一人の豊かな心を育む  
特別支援学校高等部における道徳教育

—障害の程度が比較的軽い知的障害のある生徒の  
生活に結び付いた道徳教育の在り方—



鹿児島県立武岡台養護学校  
教諭 染川功次

## 目 次

<b>I</b>	<b>研究主題設定の理由</b>	1
<b>II</b>	<b>研究の構想</b>	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究計画	2
<b>III</b>	<b>研究の実際</b>	
1	研究主題についての基本的な考え方	2
(1)	研究を進めるに当たって	2
(2)	知的障害特別支援学校における教育課程	2
(3)	知的障害特別支援学校における道德教育	3
2	道德教育についての実態調査及び意識調査	3
(1)	実態調査及び意識調査の概要	3
(2)	特別支援学校及び高等特別支援学校の実態調査の結果	4
(3)	本校教職員の道德教育に関する意識調査	5
(4)	実態調査，意識調査からの課題と改善策	6
3	各教科等を横断的に結び付けた道德教育の構想	7
(1)	知的障害のある高等部生徒と道德教育	7
(2)	知的障害特別支援学校における道德教育の指導の工夫	8
4	検証授業の実際と考察	15
(1)	検証授業のねらい	15
(2)	検証授業の概要	15
(3)	検証授業Ⅰ（生活単元学習）の実際	16
(4)	検証授業Ⅰの考察	20
(5)	検証授業Ⅱ（特別活動）の実際	21
(6)	検証授業Ⅱの考察	24
<b>IV</b>	<b>研究のまとめ</b>	
1	研究の成果	26
2	今後の課題	26

## I 研究主題設定の理由

学習指導要領の改訂に伴い、今日の学校教育には、「生きる力」を育むという基本理念の継承と、その具体的手立てを確立し、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視した更なる教育活動の充実が期待されている。学校を取り巻く諸状況の変化に適切に対応し、自立し社会参加していくために、特別支援教育においては、子ども一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導及び必要な支援を行うことが求められている。また、対人関係や社会性を育成し、豊かな心をもって生きていくことができる人間を育成する上で、道德教育の充実を図ることも求められている。

本校においても、生きる力を身に付け、将来の自立や社会参加に向けて、「あかるく、なかよく、たくましく」生きる人間を育成することを学校教育目標として、日々の教育活動に取り組んでいる。特に高等部では、生徒の実態が多様化する中、社会生活上のルールやマナー、望ましい生活習慣など、卒業後の社会において必要な力を身に付けるための学習に重点を置いて取り組んでいる。しかし、小・中学校における友人や集団からの疎外感など様々な理由から、自己肯定感をもてないまま育ってきている生徒も少なくない。相手の気持ちを考えずに心ない言動で人を傷つけたり、性的関心等から自分本意な行動をとってしまったりと、友人間のトラブルや生徒指導上の問題など、日々の生活において対人関係をめぐる様々な課題がある。また、生徒が自立し、社会参加をしていく中で、進路先での人間関係のトラブルや離職などの課題もみえてくる。これら教育的課題は、社会経験の少なさや家庭環境の違いなど環境的要因や社会的スキルの不足、生徒自身の障害特性や内面的成長の違いによるものなど複雑な要因が背景にあると考えられる。

これらの現状を踏まえて高等部の教育を再考するとき、社会参加へ向けてのスキルを学ぶことに加え、社会生活を円滑にするため、自らを律しつつ、他人と協調し、相手を思いやる心や感動する心などを育てるための道德教育が重要である。そこで、新学習指導要領において、道德教育の充実が求められていることを受けて、本校でも今年度新たに道德教育の全体指導計画を作成し、教育活動全体を通じて行う道德教育の方向性を示した。これを積極的に推進していくには、教師自らが道德性を育成することの必要性を意識し取り組むことが大切である。そのためには、教科別の指導、領域別の指導、各教科等を合わせた指導の中で道德教育の内容を適切に設定し、年間指導計画に基づいた計画的な指導がなされていく必要があると考える。

そこで、道德的心情や道德的判断力、道德的实践意欲と態度を育てるために、指導内容の重点を明確にし、生活と結び付いた実際の、具体的な学習活動を設定して、計画的に展開できるような、知的障害のある生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、知的障害特別支援学校）高等部の道德教育の在り方を明らかにしたい。これらの研究を通して、豊かな心を持ち、他人と協調しつつ、自立的な社会生活を送ることができる「生きる力」を身に付けた生徒を育成できるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の構想

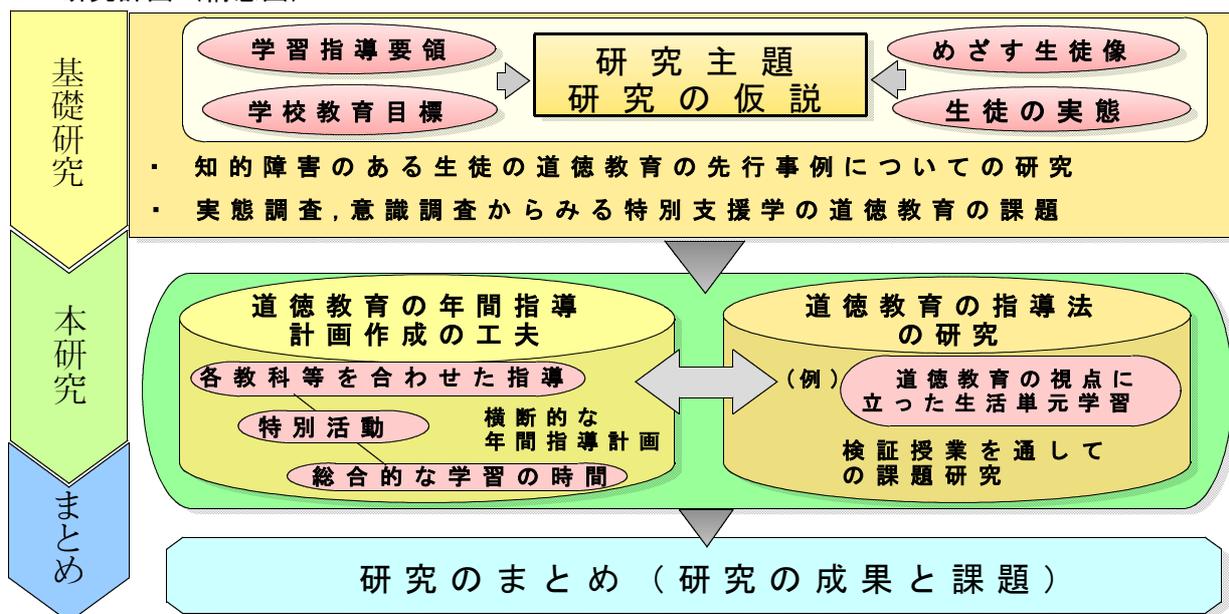
### 1 研究のねらい

- (1) 実態調査等を通して、知的障害特別支援学校における道德教育の充実を図るための課題を明らかにする。
- (2) 知的障害特別支援学校において、各教科等と道德教育を横断的に結び付け、道德性を育むための年間指導計画作成と効果的な指導の在り方を明らかにする。
- (3) 検証授業を通して、研究内容の妥当性を検証し、本研究の成果と課題を明らかにする。

### 2 研究の仮説

知的障害のある生徒の道德教育における指導内容の重点を明確にし、各教科等を横断的に結び付けた実際の、具体的な学習活動に位置付け、それを計画的に展開することで、豊かな心を持ち人間関係を築く力や社会参加への意欲や態度を身に付けた生徒を育成できるのではないかと考える。

### 3 研究計画（構想図）



## III 研究の実際

### 1 研究主題についての基本的な考え方

#### (1) 研究を進めるに当たって

知的障害特別支援学校において、障害の程度や個々に対する教育的ニーズは実に多様になっている。その中でも、障害の程度が比較的軽い生徒は、卒業後、すぐに社会へ出るケースが多く、豊かな心を持ち人間関係を築いたり、他人と協調しつつ、自立的な社会生活を送ったりする力を身に付けておくことは喫緊の課題であると考えます。

そこで、本研究においては、研究の対象を高等部卒業後に就労を希望している知的障害の程度が比較的軽い生徒とした。特別支援学校高等部においては、知的障害のある生徒に対する教育を行う特別支援学校のみ、道徳が領域として設けられている。ただし、その扱いについては、全教育活動の中で指導を行う場合と道徳の時間を設けて指導を行う場合があり、生徒の実態に応じて指導をすることとなっている。実際には、本校をはじめ多くの知的障害特別支援学校において、時間を設けて道徳教育を行うより、各教科等を合わせた指導等において、生活と結び付けて指導の方が効果的であるという考え方にに基づき、道徳の時間を設けず、全教育活動の中で指導を行っている。

これらのことから、知的障害特別支援学校において、道徳教育の充実を図るためには、どのようなアプローチができるのかという視点から本研究を進めることとした。

#### (2) 知的障害特別支援学校における教育課程

知的障害のある生徒の道徳教育を考えるに当たって、知的障害特別支援学校の教育について、特別支援学校学習指導要領解説を基に整理する。知的障害特別支援学校高等部の各教科等については、学校教育法施行規則第128条第2項において規定されており、さらに、学習指導要領第1章第2節第3款において、各教科等の履修について示されている。それらに基づく教育課程の構造例を図1に示した。知的障害特別支援学校の指導の特徴として、生徒の知的障害の状態等に即した指導を進めるため、指導の形態として、各教科等を合わせた指導と、教科別の指導及び領域別の指導がある。これらを適切に組み合わせて指導を行っている。

国立特殊教育総合研究所が行った全国の知的障害特別支援学校(小学部から高等部)の教育課

程に関する調査（2004年）では、次のようなことが明らかになった。知的障害特別支援学校の総授業時数に占める教科別の指導，領域別の指導，総合的な学習の時間，領域・教科を合わせた指導（現在の各教科等を合わせた指導）の授業時数の割合は，各学部共に各教科等を合わせた指導の時間が大半を占めている。このことは，知的障害特別支援学校における学習の特徴として，生活に結び付いた内容を実際のな場面で具体的な活動を通して指導する各教科等を合わせた指導の時間が，学習の中心となっていることを表している（表1）。

(3) 知的障害特別支援学校における道徳教育

特別支援学校学習指導要

領(高等部)においては、「青年期の特性を考慮して，健全な社会生活を営む上に必要な道徳性を一層高めることに努めるものとする。」と示されている。また，全教師が協力して道徳教育を展開するため，各学校において道徳教育の全体計画を作成することが新たに規定された。

これを受け，指導計画と内容の取扱いについては，「知的障害の状態や経験等に応じて適切に指導の重点を定め，指導内容を具体化し，経験的な活動を取り入れるなどの工夫を行うものとする。」，「生徒の学習上の特性から，生活に結び付いた内容を実際のな場面で具体的な活動を通して指導することが効果的である。」<sup>\*1)</sup>と述べられている。

2 道徳教育についての実態調査及び意識調査

(1) 実態調査及び意識調査の概要

各学校における道徳教育の進め方や現状，課題を把握するため，鹿児島県内の特別支援学校15校及び九州内の高等特別支援学校7校を対象に，質問紙による実態調査を行った。調査対象の県内の特別支援学校及び九州内の高等特別支援学校は，それぞれ生徒の実態・学校の障害種等も異なるため，全ての調査内容の単純比較はできない。そこで，共通する部分として知的障害のある生徒の教育に関する調査項目を設け，比較・分析を行った。また，各学校における実態調査と併せて，本校教職員140人を対象に，道徳教育に関する特別支援学校教職員の意識調査を行った。各調査の概要は以下に示すとおりである。

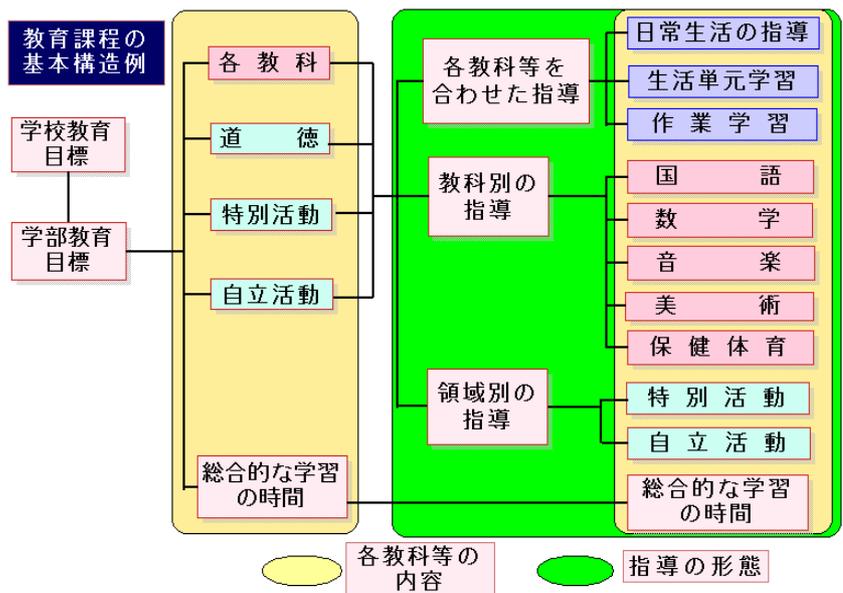


図1 知的障害特別支援学校（高等部）の教育課程構造例

表1 教育課程に関する調査（一部抜粋）  
国立特殊教育総合研究所（2004年）

	教科別の指導	領域別の指導	総合的な学習の時間	領域・教科を合わせた指導 (各教科等を合わせた指導)
小学部3年	23.3%	7.2%		69.5%
小学部6年	26.9%	8.5%		64.6%
中学部3年	29.2%	8.1%	4.9%	57.8%
高等部3年	35.8%	8.6%	4.4%	51.2%

\*1) 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）』 2009年 海文堂出版

ア 調査の対象

(ア) 実態調査：県内の特別支援学校15校，九州内の高等特別支援学校7校

(イ) 意識調査：本校教職員140人

イ 調査の時期

平成23年7月初旬

ウ 調査の方法

調査方法：質問紙による実態調査及び意識調査

エ 調査の内容

(ア) 実態調査

- a 道徳教育に関する教育課程上の取扱い
- b 道徳教育の全体計画作成状況と内容構成
- c 道徳教育の重点目標の設定
- d 全体計画・年間指導計画等の活用状況
- e 道徳教育の充実を図るために必要なこと

(イ) 意識調査

- a 道徳教育の必要性
- b 道徳教育の時間における指導経験
- c 自校の道徳教育の全体計画
- d 道徳教育の指導内容
- e 道徳教育の充実のために必要なこと

(2) 特別支援学校及び高等特別支援学校の実態調査の結果

ア 道徳教育に関する教育課程上の取扱い

鹿児島県内の特別支援学校における道徳教育について，道徳の時間を設けて取り組んでいる学校はなかった。九州内の高等特別支援学校においては，7校中3校で道徳の時間を設けて取り組んでいる。道徳の時間を設けていない学校については，学校の教育活動全体における指導という位置付けとなっている。

イ 全体計画等の作成状況

調査の結果，ほとんどの学校において全体計画が作成されている（作成途中の学校も含む）ことが確認できた。道徳教育の全体計画と併せて，各学校の道徳教育年間指導計画の作成状況を調査した結果，特別支援学校の中でも，知的障害を伴わない生徒の教育を行う学校においては，年間指導計画が作成されているものの，知的障害特別支援学校では，年間指導計画が作成されていない。九州内の高等特別支援学校においては，7校中5校が年間指導計画を作成しており，道徳の時間を設けている3校以外でも，2校で年間指導計画を作成していることが分かった。

ウ 道徳教育重点目標の設定

県内特別支援学校において，障害種に関わらず，各学部ごとに道徳教育の重点目標や内容を決めている学校は，全体の80%であった。その重点目標や内容を設定する際に，重視していることについては図2に示すとおりであった。多くの学校が，学校教育目標や学部・学年の目標，道徳教育の内容項目や児童生徒の実態を考慮し，学部

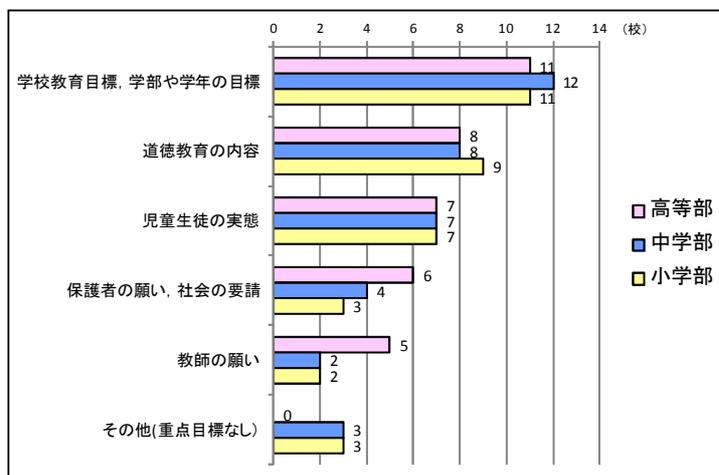


図2 各学部における道徳教育重点目標や内容の設定で重視していること（複数回答）

の道徳教育重点目標や内容を設定している。これらのことから、道徳教育を行う上で必要な大きな枠組みは、ほとんどの学校で整えられていることが分かった。

#### エ 全体計画や年間指導計画の活用状況

全体計画・年間指導計画があまり活用されていないという学校が多く、いずれの学部においても、活用されているという回答数を上回っている（図3）。また、活用されているとの回答があった学校においては、「目標や内容を確認する目的での使用がほとんどである」という回答が多かった。

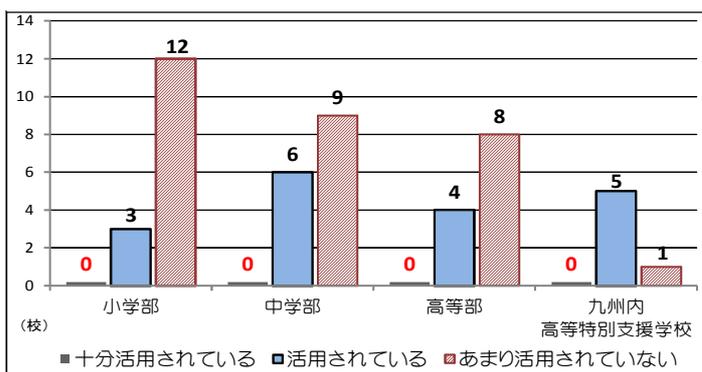


図3 全体計画や年間指導計画の活用状況

#### オ 十分活用されていない理由

道徳教育の全体計画や年間指導計画が十分活用されない理由（高等特別支援学校，高等部）（図4）について、最も多いのは、「道徳の時間における指導がないため」で、次いで、「道徳教育を意識した取組が少ないため」ということであった。これは、小学部，中学部においても同様の傾向がみられた。その他として「全体計画を活用しているという意識が少ない」や「教職員があまり道徳教育を意識していない」などの回答があった。

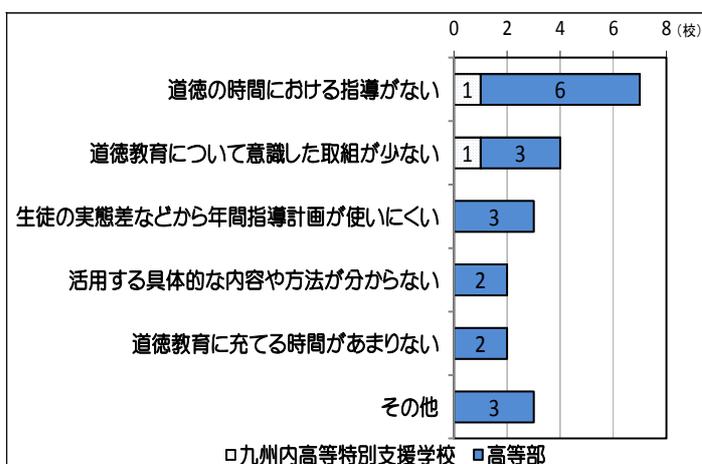


図4 全体計画，年間指導計画が十分活用されていない理由（高等特別支援学校，高等部）

これらの結果から、全体計画や年間指導計画が全教育活動のあらゆる学習場面において、効果的に活用されていないということと、道徳教育を計画的に指導するという教職員の意識の問題という二つの大きな課題があると考えられる。

### (3) 本校教職員の道徳教育に関する意識調査

#### ア 道徳教育の必要性

特別支援学校において道徳教育（道徳性を養うこと）の必要性を感じるかどうかという問いについては、回答者全体の約85%がその必要性を感じていることが図5の結果から分かった。その主な理由として、高等部においては、生徒指導上の問題が増えてきていることなどを背景とした記述や、社会で自立していく

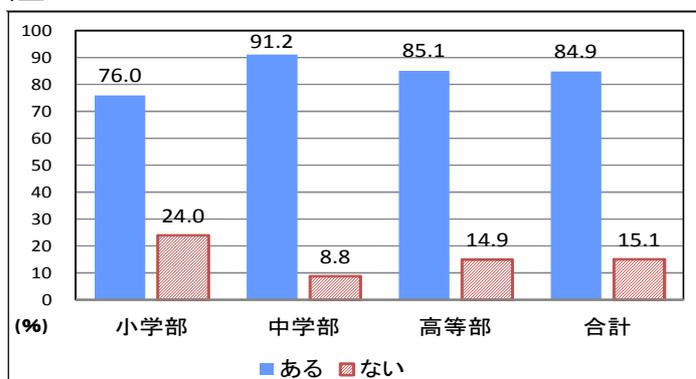


図5 特別支援学校において道徳教育の必要性を感じるかどうか

上で身に付けておくべきルールやマナーなどの、対人関係や集団生活に関する記述が60%を超え、道徳教育の内容項目では「主として他の人とのかかわりに関すること」、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に関連する記述が多かった。小学部，中学部におい

では、これらに加えて、あいさつや健康などの基本的な生活習慣に関する内容も加わり、「主として自分自身に関すること」の内容項目に関連する記述もみられた。必要性を感じないと回答では、「知的障害のある生徒の道徳教育について、知識や理解に不安を感じる」や「道徳教育について意識して取り組むことがないため」などの理由が挙げられた。また、これらの回答をした教職員の内、75%が道徳の時間の指導経験がないことも分かった。このことは、指導経験の少なさから、道徳教育の指導に迷いや不安があることや、道徳教育を意識した取組をすることが難しいという側面があると考えられる。

#### イ 道徳の時間の指導経験との関連

全学部の結果を見ると道徳の時間の指導経験がある教職員が、約半数いることが分かった。学部別に比較すると小・中・高等部の順で指導経験者の割合が少なくなっている（図6）。この結果と、図5の結果の関連をみてる。道徳教育の必要性を感じないと回答した教職員の割合は、小学部がやや高くなっているが、その中の80%は道徳の時間の指導経験があることが分かった。このことから、道徳についての知識はあるが、小学部段階では日常生活に必要な身辺自立へ向けての知識や技能の習得を重視することが多く、道徳教育と様々な学習との関連に気付きにくい状況があることなどが予想される。

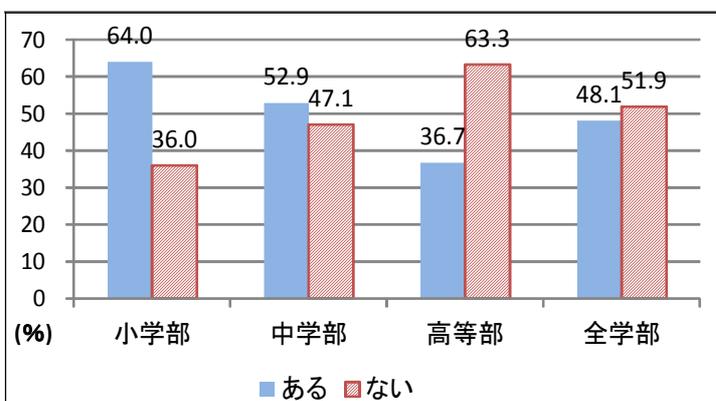


図6 これまでの教職経験の中で、道徳の時間の指導を経験したことがあるか

#### ウ 全体計画の改善の必要性

本校道徳教育全体計画の改善の必要性については、多くの教職員は感じていないという回答であったが、改善の必要性を感じている教職員からは、「具体的な指導の内容が示されていないため、いつ何を指導したらよいのか分かりにくい」や「他教科との関連や取り扱う内容について明確にする必要がある」、「普段から教師が意識するような細かい視点が必要である」などの回答があった。

#### エ 道徳教育を意識して取り組む指導の形態

特別支援学校高等部の回答では、道徳教育を意識しやすい学習として、日常生活の指導や生活単元学習などの各教科等を合わせた指導や特別活動などの領域別の指導が挙げられ、国語や数学などの教科別の指導の時間は、道徳教育を意識しにくいと捉えられている傾向がみられた（図7）。

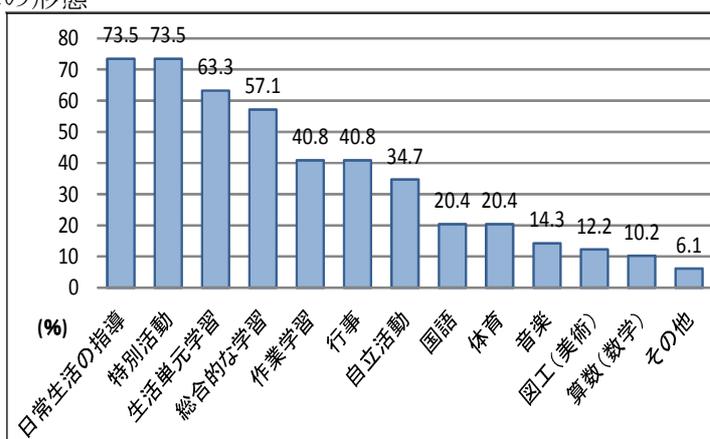


図7 特別支援学校で、どのような学習で道徳教育を意識しているか（高等部）（複数回答）

### (4) 実態調査，意識調査からの課題と改善策

#### ア 道徳教育推進上の課題

各学校における実態調査と本校教職員を対象にした意識調査において、道徳教育充実のためにどのようなニーズがあるかを把握するための共通の調査項目を設け、その結果を表2にまとめた。

表2 道徳教育充実のために必要なこと（実態調査・意識調査）

道徳教育充実のために必要なこと	実態調査	意識調査
	高等特別支援学校・ 県内の高等部(順位)	本校教職員(順位)
学校における道徳教育の基本方針(学校としての基本的な考え方)の共通理解	1	1
道徳教育の年間指導計画・具体的な指導計画(単元のねらい,内容,指導の時期等)	3	5
道徳教育のねらいや内容一覧	5	7
道徳教育の先行事例	8	3
個別の指導計画における指導内容の明確化	3	10
道徳教育について,教職員の意識高揚	2	6
道徳教育の指導法や取組例	10	2
道徳教育に必要な教材や資料	8	9
教職員の研修の機会	7	4
家庭や地域との連携	5	8

表内の数字は、選択数の多かった順に1～10までの順位を示している。実態調査と意識調査のいずれの調査においても、最も多いのは学校の基本的な姿勢として、道徳教育を教育活動にどのように位置付けるかなどの「基本方針の共通理解」を図ることであった。実態調査においては、2番目に「教職員の意識の高揚」、3番目に「年間指導計画や具体的な指導計画、個別の指導計画における指導内容の明確化」と続いている。しかし、意識調査においては、2番目に「道徳教育の指導法や取組例」を選択している教職員が多く、続いて「道徳教育についての先行事例」、「教職員の研修の機会」となっている。このことは、道徳教育充実への考え方が、学校と個人ではそれぞれに違いがあることを示している。つまり、学校としては、道徳教育の充実を図るためには、教職員が道徳教育をもっと意識して取り組む必要があるという結果が出ているのに対し、教職員を対象とした意識調査においては、授業や指導の場ですぐに実践に結び付くような具体的な取組例や先行事例などを求める声が多くなっている。このような調査結果から、道徳教育推進上の課題として、学校における基本方針についての共通理解が十分でないことや、知的障害のある児童生徒に対する具体的な道徳教育の指導法や取組が確立されていないことなどが考えられる。

#### イ 現状から考える改善策

知的障害特別支援学校における道徳教育は、その必要性については理解されているが、生徒の学習上の特性から、ほとんどの学校で道徳の時間としては設けられていない。また、自己の生き方について考えを深めたり、心情を言葉で表現したりすることが難しいなどの多様な生徒の実態があることから、道徳教育については、具体的な取組例や先行研究が非常に少なく、一般的に意識されにくい状況がある。さらに、道徳教育の全体計画は作成されているが、多くの学校で具体的な指導の場や内容等を示す年間指導計画が作成されておらず、道徳教育の充実を意識した十分な取組ができていない現状がある。

そこで、生活と結び付いた内容を、実際的な場面で具体的に指導することや、各教科等の指導計画の中に、道徳教育との関連や指導内容等を明確に位置付けることなどで、その改善が図られるのではないかと考えた。

### 3 各教科等を横断的に結び付けた道徳教育の構想

#### (1) 知的障害のある高等部生徒と道徳教育

永江<sup>\*2)</sup> (2008) は、道徳性の発達段階について、コールバーグの道徳性発達段階に基づいて

\*2) 永江誠司 『教育と脳 多重知能を生かす教育心理学』 2008年 北大路書房

考えると、道徳性の発達を促すためには、相手の立場に立って考えることができること、一つ高い道徳発達段階の考えにふれること、自分の行動が引き起こす結果が相手に及ぼす影響を推理することなどが大切であると述べている。また、子どもが自らの道徳性を発達させるためには、相手の心に気付き、お互いの感じ方や考え方の違いを認め、共感し、更により高い水準での問題の解決を図ることが重要であるとしている。

このような道徳性の発達について、知的発達の状態がどれほどの影響を及ぼすのか、明確な根拠を示すところまでは至っていない。しかし、道徳性に限らず、障害の有無、種類、程度のいかんにかかわらず、全ての子どもは集団の中で人とのかかわりを通して発達すると考えられている。障害があっても、身に付けるべき基本的な力は変わりはない。道徳性の発達は、放っておけば促進されるものではなく、個々に応じた働き掛けや支援が必要であると言える。このような意味において、知的障害者の道徳性の発達への支援は、コールバーグの道徳性の発達理論でいう、罰せられるか褒められるかという行為の結果のみが、その行為の善悪を決定する慣習的水準以前の第一段階「罰と服従への志向」や、あなたが私のために〇〇をしてくれるなら私もあなたに〇〇する、というような第二段階の「道具主義的な相対主義志向」でとどまることがないように、私たち教師が常に意識して取り組む必要がある。

道徳教育は、豊かな心を持ち、人間としての在り方生き方の自覚を促し、道徳性を育成することをねらいとする教育活動であり、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。人間としての在り方生き方に関する教育の趣旨について、特別支援学校学習指導要領解説総則編には「高等部段階の生徒は、自分の人生をどう生きればよいか、生きることの意味は何かということについて思い悩む時期である。また、自分自身や自己と他者との関係、さらには広く国家や社会について関心を持ち、人間や社会の在るべき姿について考えを深める時期でもある。それらを模索する中で、生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観・世界観ないし価値観を形成し、主体性をもって生きたいという意欲を高めていくのである。」と示されている。したがって、高等部においては、このような生徒の発達の段階を考慮し、人間としての在り方生き方に関する教育を推進することが求められている。

## (2) 知的障害特別支援学校における道徳教育の指導の工夫

### ア 道徳教育推進の流れ

知的障害特別支援学校における道徳教育の充実を図るための一連の流れを図8に示す。

まずは、学校における道徳教育の基本方針を示す全体計画を作成する。それを基に、年間指導計画の作成をする。その際、生徒の実態に応じた指導を行うための、指導の重点化を図ることが大切である。また、要となる道徳の時間を設けていない特別支援学校においては、各教科等の指導など、様々な教育活動を横断的に結び付け、道徳教育を行う必要がある。その手順として、まず、重点目標に沿った道徳の内容項目を明らかにする。次に、その内容項目を重点的に指導する各教科等を選定し、道徳的価値について考える時間を設定する。これらの一連の流れからみえてきたことを基に、さらに、その評価をフィードバックし、年間指導計画や全体計画の見直しへとつなげることが重要である。また、全体計画や年間指導計画と関連して、一人一人の道徳教育に関する指導内容や方法について、個別の指導計画に明記していくことによって、より個々の課題や道徳性について充実した取組ができるようになるものとする。このような指導と評価の一連のサイクルを確立することが、知的障害特別支援学校の道徳教育の更なる充実を図る上での核となるはずである。

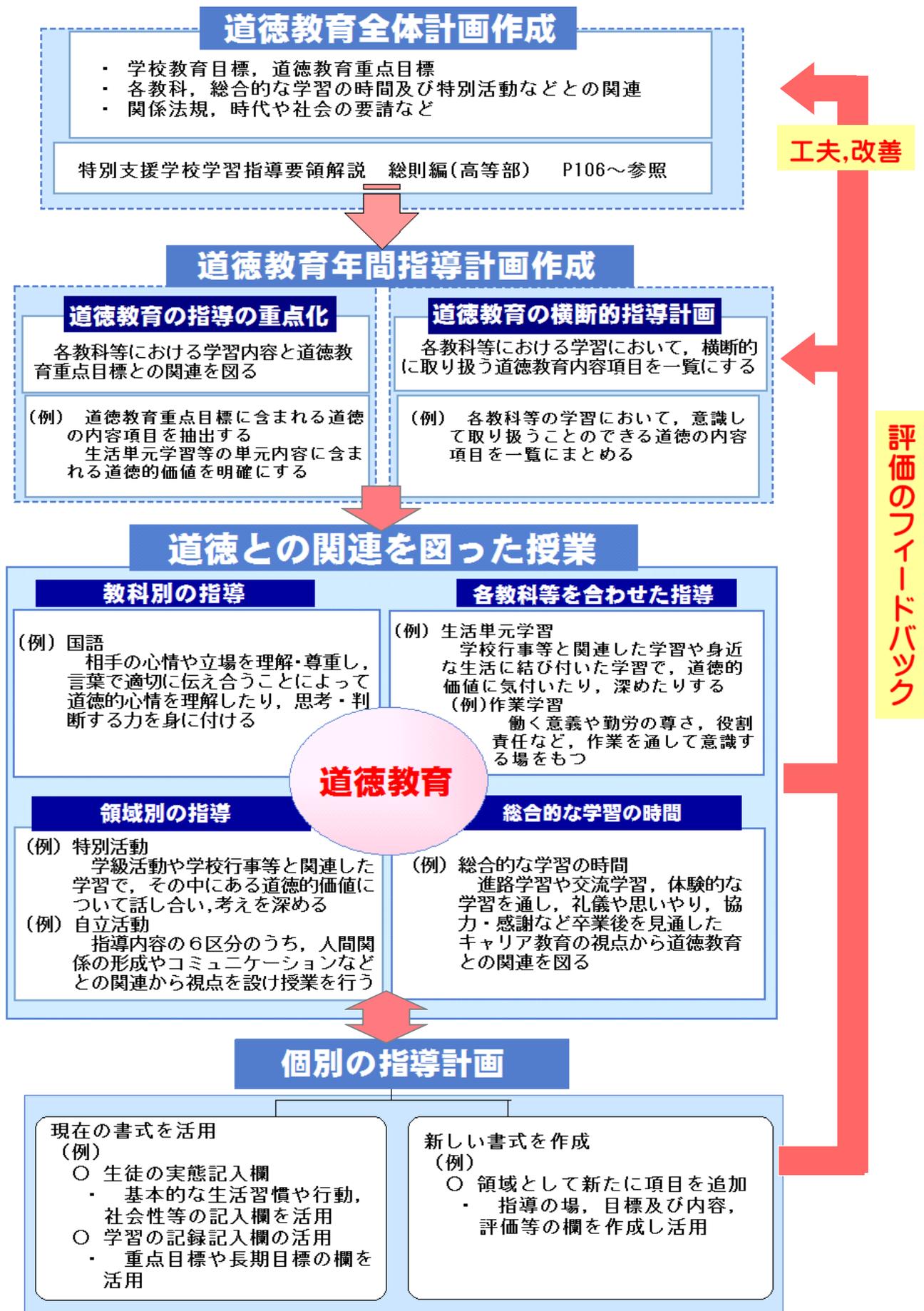


図8 道徳教育推進の流れ

## イ 道徳教育の全体計画

道徳教育の全体計画は、学校における道徳教育の基本方針を示すとともに、それを具現化する上で、「学校として特に工夫し、留意すべきことは何か」、「各教育活動がどのような役割を果たすのか」、「家庭や地域社会との連携をどう図っていくのか」などについて総合的に示すことが重要である。各特別支援学校における道徳教育の全体計画については、ほとんどの学校において作成されている。その書式や記されている内容はそれぞれの学校の実態に応じた独自のものであり、学習指導要領解説総則編（高等部）の道徳教育の全体計画の作成の考え方を基に、各学校で工夫して作成されているものと考えられる。そこで、あえてここでは全体計画の具体的な書式や内容については示さず、学期や年度ごとの節目において道徳教育の全体計画を振り返るための視点を表3にまとめた。その際、「特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）」（文部科学省）の第2編第2部第1章第8節「全体計画作成上の創意工夫と留意点」を参照した。

表3 道徳教育全体を振り返るための視点

	道徳教育（全体計画）作成上の留意点	評価・課題
①	校長の方針の下に全教師の協力・指導體制が整えられているか。	
②	道徳教育の特質を理解し、具体的な取組を明確にし、教師の意識の高揚を図れるようになっているか。	
③	学校の特色を生かして、重点的な道徳教育が展開できるようになっているか。	
④	学校の教育活動全体を通じた、道徳教育の相互の関連性が明確になっているか。	
⑤	生徒の実態を踏まえ、保護者及び地域の人々の意見を活用することや、学校間交流、関係諸機関との連携に心掛けているか。	
⑥	計画の実施及び評価・改善のための体制が確立されているか。	

## ウ 年間指導計画の作成

道徳教育を推進していく上で、全体計画に示した基本的な考え方を、より具体的に示すものとして年間指導計画がある。小・中学校では、週に1時間（年間35時間、小1は34時間）の道徳の時間が実施され、年間指導計画には一単位時間ごとの題材や指導目標・内容、資料等が年間を通じて明確に示されている。これに対し、実態調査・意識調査においても明らかになったように、知的障害特別支援学校高等部では、領域として道徳教育があるが道徳の時間は、ほとんどの学校において設定されていない。このことは、年間指導計画を考える上で、小・中学校とは、明らかな違いがある。そこで必要になってくるのは、指導内容の重点化という考え方である。ここでいう指導内容の重点化とは、次のようなことを意味する。中学校道徳教育において指導する24の内容項目を参考に、生徒の実態に応じて特に必要な内容項目を焦点化し、道徳教育の重点目標と関連付けて指導内容を適切に設定する。この重点目標に沿った内容項目を、年間を通じて計画的に取り扱うことができるようにすることが大切である。そのために、各教科や領域別の指導、総合的な学習の時間や各教科等を合わせた指導の学習内容から、道徳教育の重点目標と関連の深いものを抽出する。その時間の中で、道徳教育との関連をより意識した取組ができるように指導の場を設定し、それぞれを横断的に結び付けて取り扱うことができるような年間指導計画を作成することにした。

### (7) 各教科等を横断的に結び付けた指導

年間指導計画作成において、各教科等を横断的に結び付けて取り組むことで、教育活動全体を通じて取り組む道徳教育の具体的な方法を示す。この考え方は、押谷由夫<sup>\*3)</sup>が提唱し

\*3) 押谷由夫 『道徳教育新時代』 1994年 国土社

た「総合単元的な道徳学習」の考え方を参考にしている。この「総合単元的な道徳学習」について、押谷（1994）は、次のように定義している。

経験単元(生活単元—経験や体験をもとに構成)、教材単元(知識や技能の習得を中心として構成)を総合的に捉え、各教科や特別活動等(「総合的な学習の時間」を含む—筆者)の各教育活動の特質を生かしながら、共通した道徳的価値に関する学習内容について、道徳の時間を中心に、有機的なまとまりをもたせた学習活動を計画すること。

ここでいう「総合単元的な道徳学習」は、道徳の時間を要として、日常生活や様々な学習活動において、継続的・発展的に行われる道徳学習を計画することを提唱している。本研究においては、生徒の道徳性を育む場を総合的に捉え、生活単元学習や特別活動、総合的な学習の時間などの特質を生かして行われる道徳的価値に関わる学習を、学校や学部で設定した道徳教育の重点目標に沿って横断的に結び付け、生徒の意識の流れを大切にしながら道徳教育が展開できるように計画することとした。

(イ) 知的障害教育における各教科等の指導と道徳教育との関連

特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）には、知的障害のある生徒に対する特別支援学校の各教科の基本的な考え方がそれぞれ示されている。各教科の内容は、学年別に示されておらず、2段階で示してある。これは、対象となる生徒の学力などが、同一学年であっても、知的障害の状態や経験等が様々であり、個人差が大きいことから、個々の実態等に即して、各教科の内容を選択し、指導できるようにしているためである。各教科等を横断的に結び付けた年間指導計画を作成するために、各教科の目標、内容等を基に道徳教育との関連を一覧表にまとめた（表4）。

表4 各教科の目標・内容等と道徳教育との関連表(一部)

	各教科	各教科の目標・内容等と道徳教育との関連
教 科 の 指 導	国語科	目標：「生活に必要な国語についての理解を深め、伝え合う力を高めるとともに、それらを適切に活用する能力と態度を育てる。」 相手の立場や気持ちを尊重しながら、言葉で伝え合う力を高めることは、教育活動全体で道徳教育を進めていく上での基盤となるものである。また、社会生活を営む上での対人関係におけるコミュニケーション能力を重視し、実際の生活の中で場面や状況などを踏まえて、適切に活用できる能力と活用しようとする主体的な態度を育成することは、道徳教育の「主として他の人とのかかわりに関すること」や、「集団とのかかわりに関すること」との関連が深い。
	数学科	目標：「生活に必要な数量や図形などに関する理解を深め、それらを活用する能力態度を育てる。」 生徒が事象を数学的に考察し筋道を立てて考え、表現する能力を高めることは、道徳的判断力の育成に資することであり、工夫して生活や学習しようとする態度を育てることに資するものである。社会生活を営む上で必要な金銭や時計の学習については、道徳教育の「主として自分自身に関すること」との関連が深い。
	音楽科	目標：「表現及び鑑賞の能力を伸ばし、音楽活動への意欲を高めるとともに、生活を明るく楽しいものにする態度と習慣を育てる。」 表現及び鑑賞の能力を伸ばすことは、自分の個性を生かした表現をしていく能力を伸ばさせるということであり、美しいものに感動する豊かな心を育てることである。自由な発想を生かした表現活動をし、主体的に音楽にかかわることによって、達成感や成就感を味わい、豊かな情操を育てることにつながる。このことは、道徳教育の「主として自然や崇高なものに関すること」との関連が深い。

また、総合的な学習の時間と特別活動については、高等学校学習指導要領解説を基に道徳教育との関連を明らかにした。さらに、自立活動については、学習指導要領解説自立活動編を、各教科等を合わせた指導については、本校のねらいや内容を参考に道徳教育との関連をまとめた（表5）。

表5 各教科等の目標・内容等と道徳教育との関連表(一部)

	各教科等	各教科等の目標・内容等と道徳教育との関連
領域別の指導	特別活動	特別活動の目標である、望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てること。人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うこと。これらは、集団活動を通して、道徳的実践意欲や態度の育成に資するものである。
	自立活動	言語、感覚、知覚、運動機能、情緒、行動などにおける障害の状態を的確に把握し、改善、克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うことは、併せて道徳的心情の育成に資するものである。
各教科等を合わせた指導	日常生活の指導	基本的な生活習慣の内容や、あいさつ、言葉遣い、礼儀作法、時間や規則を守ることなど、日常生活や社会生活において必要で基本的な内容を学習することは、道徳的実践意欲や態度の育成に資するものである。
	作業学習	勤労の意義について理解したり、職場で他の人と一緒に働くために必要な態度や働く意欲を身に付けたり、健康管理に気を配ったりするなど、実社会へ出てから必要とされる内容を多く含んでいる。また、主体的に社会に参画したり、自分の力を発揮して自立的に社会参加したりしようとする態度を育成することから、道徳教育との関連が深い。このことは、働くことを通して、道徳的実践意欲や態度の育成に資するものである。
	生活単元学習	生活に基づいた目標や課題を達成するために、生徒の興味・関心と生活経験を基礎とした学習をすることで、現在及び将来の生活に直接結び付く生活力を身に付ける。このことは、日常生活と結び付いた学習の中で、道徳的心情や道徳的判断力の育成に資するものである。
	情報	生活に必要な情報を適切に活用する基礎的な能力や態度を育てることは、情報の取り扱いに関するきまりやマナーなどの情報モラルを理解することである。このことは、社会的規範や道徳的価値観を守り、道徳的判断力を育成することに資するものである。
総合的な学習の時間	横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方や考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすることは、道徳的実践意欲や態度の育成に資するものである。	

(ウ) 指導の方法と工夫

内容の指導に当たっては、特別支援学校学習指導要領解説総則編(高等部)に、「個々の生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、適切に指導の重点を定め、指導内容を具体化し、体験的な活動を取り入れるなどの工夫を行うものとする。」と示されている。

指導の工夫には、下に示すような様々な方法や教材・教具、学習の形態などが考えられる。個々の生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、これらを適切に組み合わせたり、指導のねらいに沿って活用したりすることが重要である。

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 生徒の興味・関心や生活に結び付いた題材を設定した授業</li> <li>② グループ活動や共同学習を取り入れた授業</li> <li>③ ロールプレイなどの役割演技を取り入れた授業</li> <li>④ 構成的グループエンカウンターによる手法を取り入れた授業</li> <li>⑤ ソーシャルスキルトレーニングやモラルスキルトレーニングを取り入れた授業</li> <li>⑥ ICTの活用として、コンピュータ等の情報機器や視聴覚機器を取り入れた授業</li> <li>⑦ 絵本やマンガを資料として活用した授業 など</li> </ul> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(エ) 道徳教育年間指導計画の作成の手順と作成例

年間指導計画作成の具体的な手順について示す。道徳教育と各教科等については、表4、表5に示したように、それぞれに関連をみることができる。各教科等を合わせた指導である生活単元学習や領域別の指導である特別活動などと道徳教育の関連を図り、道徳教育を

意識した指導を行うことで、より道徳的心情や道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を育てる取組がしやすくなるものとする。そこで、年間指導計画の単元・題材における学習内容から、道徳教育の内容項目との関連について検討し、年間を通して計画的に指導できるようにするために、「道徳教育の横断的一覧表」を作成した(表6)。また、各教科等を合わせた指導や領域別の指導等の単元・題材一覧表に、それぞれの指導の内容に含まれる道徳的価値を、道徳教育の内容項目と関連付けて示した(表7)。この表6、7を作成し活用することにより、①道徳教育の重点目標に関連する内容項目が、年間を通じてどのように配置されるか、②各教科等の指導において、どの単元や題材で道徳教育を意識して取り組むことができるか、③各教科等を横断的に結び付け、系統的に指導できるか、などをみることができるようになる。表6、7を作成する際の道徳教育の内容については、中学校学習指導要領解説道徳編の内容項目から抜粋し活用した。

表6 道徳教育の横断的一覧表(一部)

高等部 道徳教育 目標	・ 望ましい生活習慣の確立を図り、心身の健康の増進と調和のある生活のできる生徒を育成する。		(自分自身に関すること) 1-(2), 1望ましい生活習慣・健康・節度、個性の						
	・ 礼儀正しく思いやりの心もち、自他の生命を尊重する生徒を育成する。		(他の人や自然とのかかわりに関すること) 礼儀、人間愛・思いやり、生命尊重						
	・ 学級や学校、社会の一員としての規範意識をもち、自分の役割を自覚しながら協力して、主体的に役割や責任を果たそうとすることができる生徒を育成する。		(集団や社会とのかかわりに関すること) 法やきまりの遵守、社会の秩序と規律、						
指導の 形態	教科等	道徳との 関連	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
教科別の 指導	国語	教科の目標に対する道徳教育との関連	・ 相手の心情や立場を理解・尊重し、言葉を適切に伝え合うことで、道徳的心情を理解したり、道徳的思考力、判断						
	数学		・ 数学を活用して考えたり、判断したりしようとする態度を育てることで、工夫して生活や学習をしようとする態度や道						
	音楽		・ 音楽を愛好する心情や感性を育てることで、美しいものや崇高なものを尊重する態度や豊かな情操を養う。						
	美術		・ 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美しいものや崇高なものを尊重する態度や豊かな情操を養う。						
各教科 等を 合わせた 指導	日常生活の指導	日常生活の指導の目標に対する道徳教育との関連	・ 基本的な生活習慣を確立し、身近生活の向上や自立を図る。 ・ 将来の生活への関心を高め、基礎的な知識・技能・態度を学習することで、社会での集団生活を営むために必要が						
	自分自身に関すること					夏の生活 個性の伸長 1-(5)			
	他の人、自然とのかかわりに関すること	新入生歓迎会 礼儀2-(1) 思いやり2-(2)			実習事前事後学習 礼儀2-(1)	職場見学 礼儀2-(1) 勤労の尊さ4-(5)		実習事前事後学習 礼儀2-(1)	
	集団や社会とのかかわりに関すること	新入生歓迎会 集団生活の向上 4-(4)	大運動会・修学旅行 集団生活の向上 4-(4)		実習事前事後学習 勤労の尊さ 4-(5)	夏の生活 集団生活の向上 4-(4)		実習事前事後学習 勤労の尊さ4-(5)	
	作業学習	作業学習の目標に対する道徳教育との関連・配慮事項	・ 働くことの意義を理解したり、働く喜びを味わったりすることで、勤労の尊さを理解させ、勤労や奉仕を通して社会に ・ 集団で作業をすることを通じ、規律を守ることや自らの役割と責任を果たすこと、協力することの大切さなどを理解						
情報	集団や社会とのかかわりに関すること		インターネットの利用と利用上の注意 法やきまりの遵守 4-(1)						

(表中の番号は、中学校学習指導要領解説道徳編の内容項目と対応)

表7 生活単元学習と特別活動の単元・題材一覧と道徳教育との関連表（一部）

	生活単元学習(道徳教育との関連)	特別活動(道徳教育との関連)
4月	<b>新入生歓迎会</b> 2-(1)礼儀 2-(2)思いやり 4-(4)集団生活の向上	<b>新しい生活について考えよう</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(2)希望, 勇気, 強い意思 4-(4)集団生活の向上
	<b>春の野山</b> 3-(2)自然愛, 畏敬の念	
	<b>春の一日遠足</b> 4-(1)法やきまりの遵守 3-(2)自然愛, 畏敬の念	<b>整理整頓について考えよう</b> 1-(1)望ましい生活習慣
5月	<b>修学旅行</b> 2-(1)礼儀 4-(1)法やきまりの遵守 4-(4)集団生活の向上	<b>人とかかわりについて考えよう</b> 1-(1)望ましい生活習慣 2-(1)礼儀 2-(2)思いやり
	<b>大運動会</b> 1-(2)希望, 勇気, 強い意志 4-(4)集団生活の向上 4-(7)愛校心	<b>児童生徒総会</b> 4-(4)集団生活の向上
	<b>こどもの日</b> 4-(8)郷土愛	
	<b>歯みがき教室</b> 1-(1)望ましい生活習慣	<b>人とかかわりについて考えよう</b> 2-(2)思いやり
	<b>梅雨時の生活</b> 1-(1)望ましい生活習慣	
6月	<b>梅雨時の生活</b> 1-(1)望ましい生活習慣 3-(2)自然愛, 畏敬の念	
	<b>産業現場等における実習及び校内実習(事前・事後)</b> 1-(2)希望, 勇気, 強い意志 2-(1)礼儀 4-(4)集団生活の向上 4-(5)勤労の尊さ	
	<b>夏の生活</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(5)個性の伸長 4-(4)集団生活の向上 4-(6)家族愛	<b>1学期の生活を振り返って</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(5)個性の伸長 4-(4)集団生活の向上
	<b>職場見学(事前・事後学習)</b> 2-(1)礼儀 2-(6)感謝 4-(5)勤労の尊さ	<b>夏休みの生活について考えよう</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(5)個性の伸長 4-(6)家族愛
8月		<b>人権同和教育</b> 4-(10)国際理解, 人類愛
9月	<b>産業現場等における実習及び校内実習(事前)</b> 1-(2)希望, 勇気, 強い意志 2-(1)礼儀 4-(4)集団生活の向上 4-(5)勤労の尊さ	<b>夏休みの生活を振り返って</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(5)個性の伸長 4-(6)家族愛 4-(8)郷土愛
		<b>2学期の生活について考えよう</b> 1-(1)望ましい生活習慣 1-(2)希望, 勇気, 強い意志
		<b>いじめ問題について考えよう</b> 2-(2)思いやり 2-(3)信頼・友情 2-(5)自他の尊重, 謙虚, 寛容の心

(表中の番号は、中学校学習指導要領解説道徳編の内容項目と対応)

(オ) 個別の指導計画との関連

道徳教育の全体計画に基づく指導を進めるため、年間指導計画から個別の指導計画に至るまで、道徳教育との関連を示すことで、より指導の充実を図ることができると考える。

個別の指導計画と道徳教育の関連をもたせる理由として、右の四つが考えられる。

- 教師の意識が変わる  
(生徒の道徳性の育成を意識する)
- 子どもの見方が広がる  
(生徒の道徳性の発達と行動の関連に気付く)
- 全体計画・年間指導計画から、指導目標及び内容を個別化させる  
(授業でのアプローチの方法や機会がみえる)
- 評価の結果を授業の改善に生かす  
(学習の評価, 指導の評価を生かし, 工夫・改善する)

道徳の時間がないため、個別の指導計画には記入する必要がない

という消極的な考え方ではなく、個々の生活上の課題を改善していくためには、道徳教育の内容を積極的に個別の指導計画に位置付けていくことが重要である。

そこで、具体的な記入の方法としては、二つ考えられる。一つは既存の書式を用いる方法であり、もう一つは道徳教育の記入欄を新たに設ける方法である。個別の指導計画は各

学校において用いる書式が異なるため、今回は既存の書式を用いる方法として、本校の書式を基に考える。図9のような生徒の「基本的生活習慣」や「行動・社会性」について記入する欄を活用し、そこに道德教育の視点を含めて記入する。また、学習の記録の書式では、重点目標や長期目標を記入する欄を活用することで、どの教科や領域などで道德教育を意識して取り扱うかということも意識することができる(図10)。さらに、自立活動などとの関連から、より関連の深い各教科等の記入欄に、視点を決めて記入するという方法も考えられる。いずれにせよ、道德教育についてどのように記入していくか、あらかじめ学校や学部・学年等で共通理解を図っておく必要がある。

平成 年度 個別の指導計画(実態)				
学 年	部 年 組	記入者		
ふりがな氏名		性別	生年月日	平成 年 月 日 生
保護者名		続柄	血液型	型 ( R h )
住 所	〒 鹿児島市		【自宅】	〒 - -
家 族 状 況	○ ○ ○ ○ 父 ○ ○ 母 ○ ○ 兄		学 園	( 年 月 日 入所 )
通 学 方 法	〈徒歩〉 ( ) 号車 バス等 ( ) 〈自立通学〉・徒歩・保護者の送迎・バス・電車(利用経路)		手 帳	〈簿手帳〉あり ( A1 A2 B1 B2 ) なし 〈電卓手帳〉あり ( バス・タクシー等 ) なし 〈身体障害者手帳〉あり ( 種 類 ) なし 〈その他〉
障 害 状 況	〈障害名〉 知的障害 〈特記事項〉		帳	
医 療 健 康 状 況	〈疾患名〉 〈主治医〉 ( 病院 ) 〈服薬〉 あり・なし		〈発作〉 あり・なし 発作の状況	〈その他・罹患傾向・配慮事項〉
教育歴	幼稚園・保育園卒園 (平成 年 3月) 鹿児島市立 小学校卒業 (平成 年 3月) 鹿児島市立 中学校卒業 (平成 年 3月)			
その他				
基本的 生活 習慣	睡眠状態・生活リズム 食事・排泄 身の処理 健康管理等			
行 動 社 会 性	性格・集団参加・固執性 特異な行動・対人関係 コミュニケーション手段 情緒			

図9 本校個別の指導計画例(実態)

平成 年度 学期 個別の指導計画(学習の記録)			
○ 本年度の重点目標及び指導内容 児童生徒氏名 ( ) NO. 1			
	重 点 目 標	評 価	指 導 の 手 だ て
①			
②			
③			
◎: 十分達成できました。↑次の目標へステップアップ ○: 達成できつつあります。→目標継続 △: 達成できませんでした。↓目標・手だての見直し			
○ 学習の記録(各教科・領域別)			
教科等名	重 点 項 目	目 標	指 導 の 手 だ て と 評 価
自 立 活 動	健康の保持 心理的な安定 人間関係の形成 環境の把握 身体の動き コミュニケーション		
教科等名	単 元 ・ 題 材 名	目 標	指 導 の 手 だ て と 評 価
国 語			
日 常 生 活 の 指 導			

図10 本校個別の指導計画例(学習の記録)

#### 4 検証授業の実際と考察

##### (1) 検証授業のねらい

検証授業においては、知的障害のある生徒の道德教育の指導内容や指導方法を明らかにすること、各教科等と道德教育を横断的に結び付けた年間指導計画を、授業においてどのように具現化していくかということについて、生活単元学習と特別活動において明らかにしていくこととした。そこで、検証授業について考察を行う視点を次のように設けた。

視点1	年間指導計画に示した道德教育の内容を、どのように具現化したか。 ○ 生徒の実態の捉え方について ○ 単元・題材設定について ○ 道德教育との関連を図った学習活動の設定について
視点2	道德教育を関連付けることで、生徒の道德性は高まったか。 ○ 生徒の変容の捉え方について ○ 各教科等におけるねらいと道德教育のねらいの達成について

##### (2) 検証授業の概要

検証授業Ⅰにおいて生活単元学習と道德教育との関連を図った授業を行う。検証授業Ⅱでは、特別活動と道德教育の関連を図った授業を行い、その検証をした。またその方法は、ビデオ撮影による授業の分析(生徒の発話からどのような思考や内的認知をしたかの分析、行動観察からの分析)で検証した。

検証授業は、高等部2年生の標準学級（知的障害）で男子3人、女子2人、計5人の学級で行った。本学級は、全員が卒業後に就労を希望する生徒で編制された知的障害の程度が比較的軽い生徒が在籍する学級であり、全員が中学校の特別支援学級からの進学者である。日常生活におけるコミュニケーション手段としての言語活動については、「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」において、必要とされる基本的な力はそれぞれ身に付いており、学級集団における個々の能力は比較的高い。学級全員が、卒業後の一般就労を目指し、産業現場等における実習や各種検定等に向けて目標をもって努力している様子が見られる。しかし、個々の道徳性の発達についてはそれぞれに違いがあり、相手の気持ちを考えた言動や感情のコントロールに関する面など、対人関係等の課題もみられる。そのため、卒業後の自立や社会参加へ向け、様々な学習活動を通して、道徳的心情を育てたり、道徳的判断力や実践力を育てたりすることは、生徒の将来の生活をよりよくしていくために必要不可欠なことである。

(3) 検証授業Ⅰ（生活単元学習）の実際（単元「夏の生活」平成23年7月13日実施）

道徳教育内容項目との関連	1－（5）個性の伸長
高等部重点目標との関連	4－（4）集団生活の向上

ア 生徒の実態

生徒の実態を把握するため、学校において毎年作成されている「個別の指導計画」と学級担任からの聞き取りを行った。そして、本時で意識する道徳教育の内容項目に沿って、生徒の実態を下にまとめた。

自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができたり、他者のよさに気付き、互いに共感し合ったりする機会が少ない本学級の生徒たちは、自分を価値ある存在として肯定的に認める自己評価が低かったり、積極的によりよい学級集団としてのまとまりを築くことが弱かったりする傾向がある。生徒が自ら進んで行動をし、意欲的な言動をとることができるようになる背景には、自己の個性を固有のものとして受け入れ、大切に考えることができる自己受容的な感覚や自己実現が可能であると思える気持ちなどの自己肯定感を高めることが大切である。

また、個々の自尊感情や自己肯定感についての実態を把握するために、平成20年度から東京都教職員研修センターが調査研究で作成した「自尊感情測定尺度（東京版）」を活用し、生徒の実態把握の参考とした。表8により「自己評価・自己受容」、「自己主張・自己決定」、「関係の中での自己」の観点から生徒の状態を把握した上で、本時における全体の目標及び個人の目標を設定した。

表8 本時に関する生徒の実態（「自尊感情測定尺度」から）

氏名・性別	A 男	B 女	C 女	D 男	E 男
自己評価 自己受容	今の自分に対して満足しており、自分のことを大切に思える存在としての自己受容ができている。	今の自分への満足感や、自分のことが好きであるという気持ちが弱く、自分は誰かの役に立っているという実感も弱い。	今の自分に対して満足しており、自分のことを大切に思える存在としての自己受容ができている。	今の自分に対して満足しており、自分のことを大切に思える存在としての自己受容ができている。	自分に対して満足し、自分のことを大切に思える存在として自己受容できている。しかし、自分のよさに気付いていない。
自己主張 自己決定	他人に対して、正しいと思うことを主張することがなかなかできなかったり、自信をもって判断し行動したりすることができない。	自分の個性を大切にしたい気持ちや、自分のことは自分で決めたいという強い気持ちをもっている。	自分の行動や判断を信じていることができる。自分の個性を大切にしたいと思う気持ちがある。	自分の行動や判断に自信があり、自分が正しいと信じていることは主張することができる。自分の個性を大切にしたいと思う気持ちがある。	自分が正しいと思うことは主張し、他人の意見をなかなか受け入れることができない。自分の個性を大切にしたいという思いがある。
関係の中での自己	自分のことを必要としてくれているという人がいるという自己の存在感を感じている。	周囲の人へ感謝の気持ちを持ち、人のために役に立ちたいという気持ちをもっている。	人の意見を素直に聞いたり、自分のことを見守ってくれている周りの人への感謝の気持ちをもったりしている。	人の意見を素直に聞くことが難しい。自分のことを見守ってくれている周りの人への感謝の気持ちをもっている。	周囲の人へ感謝の気持ちを持ち、自己の存在が人の役に立っているという実感も感じている。

## イ 単元の指導計画

検証授業Ⅰを設定するに当たっては、前述した道徳教育年間指導計画（表6，7）を基に、  
道徳教育の重点目標

をより意識した授業を、単元「夏の生活」の第二次の一時間目に行うことにした。そこで、道徳の内容項目「1－（5）個性の伸長」や「4－（4）集団生活の向上」との関連を図った。単元全体の指導計画を表9に示した。

表9 生活単元学習 単元「夏の生活」指導計画

次	主な学習活動・内容	時間	指導上の留意点	道徳との関連
一	1 夏の過ごし方について話し合う。 ○ 夏の自然や気候の移り変わりについて知る。 ○ 夏の過ごし方について話し合う。	2	・ 夏は水の事故が多いことや、熱中症などに気を付ける必要があることなどから考えさせる。	1－（1） 望ましい生活習慣
二	2 1学期のまとめをする。 ○ 1学期の行事や学習、生活について振り返る。 ○ アルバムや作品の整理をする。 ○ 教室の整理や掃除をする。	3 （本時 1/3）	・ 自己を見つめ、個性を伸ばしたり、集団生活の向上につなげたりできるような意欲をもたせる。	1－（5） 個性の伸長 4－（4） 集団生活の向上
三	3 夏休みの生活について話し合う。 ○ 夏の行事や習慣を知り、夏休みの過ごし方を考える。 ○ 夏休みの生活の計画・目標を立てる。	2	・ 外出の際の約束事など、夏休み中の生活について指導する。 ・ 地域行事などへの参加や計画的な過ごし方について考えさせる。	4－（6） 家族愛

## ウ 単元について

アで述べた生徒の

実態等から、本単元を通して、生活上の課題と関連させながら、次のような力を育てたいと考えた。

- 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
- 自己が属する様々な集団の意義について理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。

本単元において、1学期の活動を振り返り、自らの成長を感じ、自己肯定感を高めることで、更なる向上を目指そうとする意欲を高め、2学期に向けての課題意識をもたせたいと考えた。また、集団生活の向上のためには、一人一人が自らの役割と責任を果たすことや相互に協力し合っていくことが大切であることから、これまでの生活を振り返ることを通して自覚させることが必要である。集団生活の中でそれぞれが個性を大切にしながら、よさを発揮できるような集団の在り方を考えられるように本単元を設定した。

具体的には、1学期を振り返るという活動を通して、頑張っていた自分や友達の姿から、自分のよさや友達のよさに気づき、相互に認め合うことで、自己から他者へと意識に広がりもてるように配慮し、生活単元学習における本単元のねらいである「更なる向上を目指そうとする意欲を育てる」ということを意識できるようにした。また、自己の役割を果たすことが集団生活の向上につながるという視点を生徒にもたせることで、新たな気づきを導き出し、個性の伸長、集団生活の向上という道徳的価値を含む内容項目について考えていくように授業を構想した。

## エ 指導に当たって

検証授業Ⅰにおいては、一人一人のよさを認める活動を学習の中心に据えることで、次のような内的な変化があるのではないかと考え授業の構想を立てた。例えば、図11のように自己の役割を果たすということについては、生徒は成功体験を重ねることで、「自分にはいいところがある」や「自分はやれる」という自信をもつことができ、

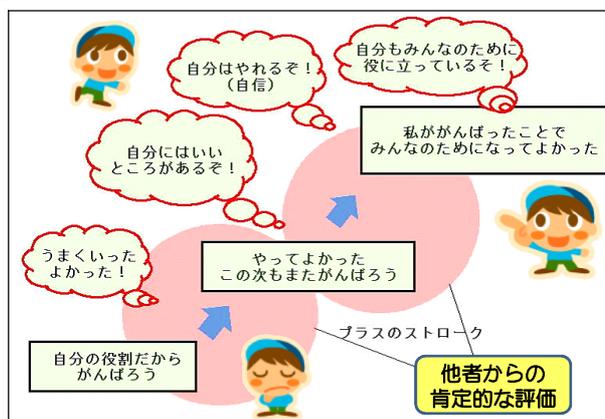


図11 一人一人のよさを認める学習(イメージ図)

そこに他者からのプラスのストローク（相手の存在や価値を認めるような働き掛け）が加わ

ることで、更に頑張ろうという意識が芽生える。また、周囲の人に認められることで、集団への所属感や「自分もみんなのためになっている」という感情が生まれ、自己から他者へと意識が広がり、自らが役割を果たすことで、集団生活の向上につながっているということへの自覚が育まれる。

オ 本時の実際 (3/7)

過程	主な学習指導	指導上の留意点	活動の様子	授業の記録
導入	1 本時の学習について知る。 今学期を振り返り、自分を見つめよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>今学期の行事や活動を振り返るスライドを見て、今日の学習について知る。</li> <li>自分や友達によさに気付くことができるようにSGE(構成的グループエンカウンター)を用いたエクササイズを行うことを理解させる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1学期を振り返るスライドを見ながら、積極的に写真について説明をする様子が見られた。映像を使うことで、1学期の様子を具体的に想起し、本時の学習のねらいについて理解することができた。</li> </ul>
展開	2 1学期の生活を振り返る。 SGE 「友だちのいいとこ探し」 (1) 1学期、友達が頑張っていたところや友達のいいところを出し合い、それぞれカードに記入する。 ↓ (2) 記入したカードを本人以外の人と交換し、お互いの意見を共有する。 ↓ (3) 今学期、自分なりにどのようなことを頑張ったかを発表する。 ↓ (4) 自分に対して書かれたカードを読む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>約束シートを活用し、SGEのルールを理解させる。</li> <li>友達の頑張っていたことを積極的に出せるような雰囲気づくりをし、カードに記入させる。(カードに記入したことに正解や不正解はないことを理解させておく。)</li> <li>自分が書いたものを次の人に回し、カードに書き加えながら考えさせる。</li> <li>事前に準備させておいた、自分自身が今学期頑張ったことを発表させる。</li> <li>友達や教師の目から見た自分について書かれたカードを読んだとき、うれしい気持ちになったことに印をつける。</li> </ul>	    	<ul style="list-style-type: none"> <li>カードに記入する前に握手をし、1学期の活動を通して、相手のいいところを真剣に考え記入していた。</li> <li>他の友達が記入した意見と同じものがあるときはシールを貼って、意思表示をすることができていた。</li> <li>シールが貼ってあることで、複数の人から認められているというプラスのストロークを表現することができた。</li> <li>友達に対してのカードを記入した後に、本人が頑張っていたと思うところを聞くことで、友達の気持ちに気付くことができていた。</li> <li>「友達が自分のよさを認めてくれてうれしい」という気持ちを、感想と表情から読み取ることができた。</li> <li>担任の先生からも、1学期頑張っていたことについての肯定的な評価をもらうことで、更に喜びが増しているように生徒の表情から感じるすることができた。</li> </ul>
	5 目標の立て方について考えることで、集団の中の自分を見つめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分自身についての目標と、学級や学校などの集団に関係のある目標の違いについて考えさせる。</li> <li>集団生活の中で、自分にできることを考えさせる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>目標の立て方について、図を基に考えた。目標の具体例を見て、「その目標はここにおいた方がいい」など積極的に発言していた。</li> <li>目標の立て方で、自分自身に関する目標から、他の人やみんなのためになる目標まで、様々な考え方が理解することができた。</li> </ul>

カ 生徒の変容

検証授業Ⅰにおいて、次のような流れで生徒の変容を捉えた。例えば、生徒Bについては、次に示すとおりである。

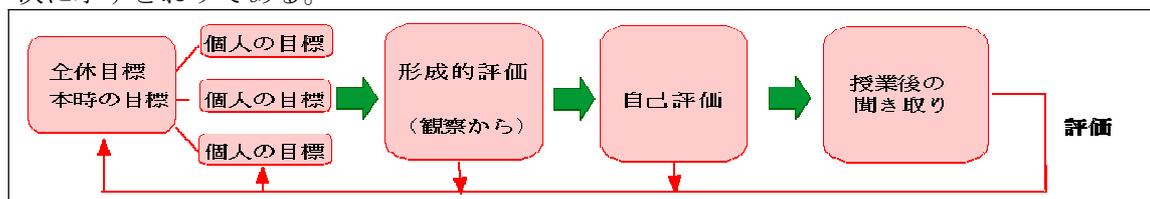


図12 生徒の変容を捉える(評価)の流れ

【本時における生徒Bの様子】

授業前の実態調査から

自己評価・自己受容

今の自分への満足感や、自分のことが好きであるという気持ちが弱く、自分は誰かの役に立っているという実感も弱い。

個別の指導計画から

日常の様子・観察

日常の様子からは、明るく対人関係も良好。控え目な性格でさりげない気配りができ、学級では頼りにされている存在。しかし、実態調査からは自己評価・自己受容は低い傾向が見られる。

本時における個人目標

- 集団生活の向上のために大切なことはどのようなことであるのかを考え、発表する。
- 他者の評価を聞き、自分に対して肯定的な考えをもつことができる。

形成的評価(観察)から

友達のいいところ探し、目標の立て方

- 友達の頑張っていたところについて考え、全員分のよいところを記入できた。
- 肯定的評価に対し、うれしい気持ちを言葉で表現できた。
- 説明を聞きながら、何度もうなずきが見られた。

自己評価結果から

自己評価内容

・ 積極的に学習に参加することができた。	○
・ 友達ががんばっていたことやよかったことについて考えたり、発表したりできた。	○
・ 目標をもつことの大切さが分かった	○
・ みんなが気持ちよく生活するために、どんなことが大切か考えることができた。	○
・ 友達からがんばっているところやいいところをほめてもらったとき、どんな気持ちがしましたか。	
・ 授業後の感想。	

授業後の観察から

- ・ 振り返りカードに記入した「ビックリした」は、色々ほめてもらえるところがあったので、ビックリしたという意味であることが分かった。
- ・ 普段、自己評価はあまり高くないが、他者に認められることで喜びを感じ、自分がやってきたことに自信がもてたという印象を受けた。

① 友達からの肯定的評価

シール

・ きさ部門で3位になった事  
 ・ 運動会でアナウンスもがくはっていた事  
 ・ 積極的なところ  
 ・ 校外実習で頑張ったところ

② 担任からの肯定的評価

- ・ 行事の中でよくがんばっていた。
- ・ 友達が困っているとき、さりげなく自分から声をかけたり、手伝ってくれたりしたところがとてもいい。
- ・ 思いやりがある行動がとれるところがよいところ。

③ 今学期、私がかんばったこと

今学期、私はこんなことをがんばりました

- 漢字検定の勉強、検定も頑張った。
- 喫茶サービス会、実習も頑張った。

私はこんな気持ちでがんばりました。

- 覚えるぞ!!と思いながら書いた。
- 自分はできる!!大丈夫!!と自分に自信をもって毎日練習に取り組んだ。

④ 自己評価表から

くうれしい気持ち。ビックリしました。  
 分かりやすく、いい授業でした。  
 楽しかったです!!

【変容】

- ・ 他者からの肯定的評価を受けることで、周りの人から認められている自分に改めて気付いた様子であった。また、事前に本人が記入していた今学期の頑張ったことと、他者からの評価が一致した部分があり、自分が頑張ったと思っているところを周りの人も同じように見ていることに対するうれしさを感じていた様子であった。
- ・ 「これまで頑張ってきたことを、これからも自信をもって頑張っていこう」という新たな目標をもち、意欲を高めることができた。
- ・ 一人一人が、自分の役割を果たすことが、みんなの生活をよりよくしていくことを理解することができた。
- ・ 授業後の聞き取りから、学級の中で、自分にできることを考えていこうという気持ちを「困っている人を助けたりできるようにしたい」という言葉で表現することができていた。

#### (4) 検証授業Ⅰの考察

##### ア 視点1について

道徳教育年間指導計画を基に、生活単元学習の「単元の指導計画」(表9)に道徳教育との関連を明記することで、道徳の内容項目を意識した授業を設計し展開することができた。

##### (ア) 実態把握

今回、一人一人のよさを認める学習活動との関連から、「自尊感情測定尺度(東京版)」を活用し、実態把握を工夫した。生徒の道徳性に関する実態については、日常生活の中でも意識して観察し、記録しておくことが肝要であると考えた。そのためには、道徳の内容項目等の記述を参考に、日頃から教師が道徳教育について意識しておくことが大切であり、そこから得られた生徒の実態を、個別の指導計画に記しておく必要があると感じた。

##### (イ) 学習活動の設定

1学期を振り返る活動を計画する際、活動の振り返りを中心としたこれまでの学習過程では、学習面、生活面、行事や役割など振り返る場面をいくつか設け、よかった点や改善すべき点などを、個人やグループ等で反省するという流れで行うことが多かった。このような学習の流れの中においては、図13の例に示すような生徒の思考が働いていると考えた。そこで今回は、自分が頑張ったところと、他者から見た頑張っていたところをワークシートに記入し合ったり、発表し合ったりする活動を学習過程の中心に位置付け、自分のよさや友だちのよさに気付くことで、生徒の自己肯定感を高められるようにした。その結果、生活単元学習と道徳教育のそれぞれの目標を達成することができたと考えた。

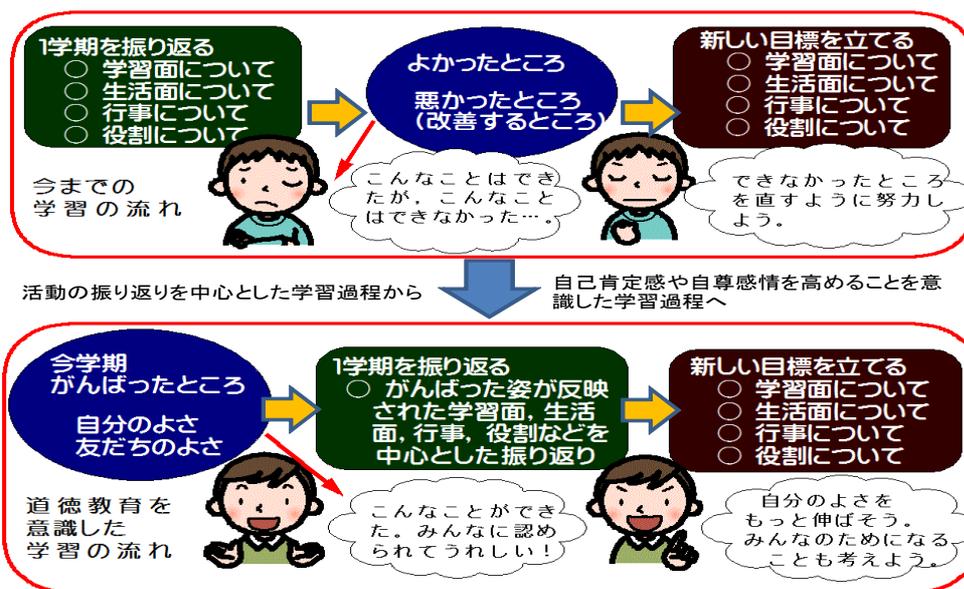


図13 検証授業Ⅰでの指導過程の工夫

##### イ 視点2について

検証授業Ⅰを終えて、生徒の変容を捉える際の工夫が必要であることを感じた。今回の授業では、生徒の心の動きを捉えるため、活動中の観察、自己評価、授業後のやりとりを整理した。生徒の実態を考えると、知的障害特別支援学校の場合、授業中のワークシートや授業後の自己評価カードの記録などの文章による表現だけでは、考えていることが十分に伝えられないことも多い。今回は、授業後に生徒と直接会話することで、その時の気持ちを補足的に聞くことができたことから、授業後の意図的な聞き取りも有効であると考えた。

授業後のまとめ・評価から、授業の直後においては、道徳性のレベルこそ異なるものの、それぞれに生徒の道徳的心情に変化があったものと考えた。

課題として、自覚化を図る際、自分の生活に結び付けるような意識をもたせることが難し

い生徒もいたことなどから、指導内容の精選や、生徒が具体的に考えたり、活動したりする場の充実などがある。

(5) 検証授業Ⅱ（特別活動）の実際（題材「いじめについて考えよう」 平成23年9月9日実施）

道徳教育内容項目との関連	4－（3）正義・公正公平
高等部重点目標との関連	2－（2）思いやり

本校においては、年に2回、「いじめ問題を考える週間」が設定されており、主に特別活動の時間にいじめに関する学習を行っている。そこで、「いじめ問題を考える週間」の特別活動に、道徳教育との関連を図った授業を設定することとした。

ア 生徒の実態

本学級の生徒は、5人中4人が小学校から高等部入学までの間に、他の児童や生徒から、暴力や無視、持ち物隠しや悪口など様々ないじめを受け、つらい思いや悲しい思いをしたという経験をしている。また、他の人がいじめているのを見たことがあるという生徒も3人いる。これらのことから、いじめが起こらないようにするにはどうすればよいか、起こったときどうすればよいかなど、常に身近な問題として考えておくことが必要である。

思春期の子どもたちは、社会の在り方について目を向けはじめたり、現実の社会のもつ矛盾や課題に気付いたりしながら、理想を求める気持ちや正義感も強くなっていく。反面、周囲の目を意識し、多くの意見や考えに左右されたり、自己中心的な考え方や行動をとったりしがちである。そのため、不正な言動やいじめをはじめ差別的言動が目前で起こった場合、内心ではいけないと思っても、勇気を出して止めるなどの行為に消極的になってしまうことも多い。本学級の生徒においても、いじめはよくないことだということを自己の体験や既習事項からもよく理解している。しかし、いじめを見たとき、「いやだと思ったけれど黙っていた」や「おもしろいと思って見ていた」など、傍観していたり、人ごととして見ていたという一面ももちあわせており、自らの善悪の判断に基づいて行動できるときと、友達や周囲の影響で、正しい判断や言動がとれないときがある。このことは、生徒の中に、相手の気持ちを想像したり、理解したりする力が弱く、友達や周囲の言動に左右されやすい、また、自らの考えを積極的に実践しようとする気持ちが弱いなどの課題があることが考えられる。

イ 題材の指導計画

本題材については、次のような指導計画を立て、道徳との関連を明記した(表10)。

表10 題材「いじめについて考えよう」の指導計画

次	主な学習活動・内容	時間	道徳との関連
一	1 いじめが起きたとき、私にできることを考えよう。 ○ 資料「わたしのせいじゃないーせきにんについてー*4」を、自己中心的な登場人物の言葉から捉え、いじめの構図について知る。 ○ 傍観者の心の弱さに気付き、いじめが起きたとき、どのような気持ちで行動することが大切なのか考える。 ○ 資料の続きのストーリーを考える中で、自分の意見を発表したり、友達の意見を聞いたりしながら考えをまとめる。	1 (本時)	4－（3） 正義、公正・公平  2－（2） 思いやり
二	2 いじめをなくしていくために大切なことを考えよう。 ○ 役割を交代しながら、ロールプレイを実際に行ってみる。 ○ ロールプレイを振り返り、そのときの気持ちや気付いたことを話し合う。 ○ いじめをなくしていくために大切なことを考え、そのためには自分はどうしていきたいのかを発表する。	1	4－（3） 正義、公正・公平  2－（2） 思いやり

ウ 題材について

今回、資料「わたしのせいじゃないーせきにんについてー」\*4)を用いて授業を行った。この資料は、泣いている男の子と「〇〇だから、わたしのせいじゃない」と自己弁護をする14人の子どもたちが登場する、スウェーデンで生まれたいじめについて考える絵本である。い

\*4) レイフ・クリスチャンソン 『わたしのせいじゃないーせきにんについてー』1996年 岩崎書店

はじめがあったこととその状況を、泣いている子どもの周囲にいた子たちが、責任を押し付け合う発言から読み取ることでできるような内容で構成されている。いじめられている生徒の気持ちを考えるという視点からだけでなく、いじめの積極的な加害者ではなくても、周囲で傍観していたり、見て見ぬふりをしていたりすることは、いじめを助長しているという傍観者の存在の意味に気付かせるのによい読み物である。

本題材を工夫して、いじめられている人と傍観者の心情について考えさせ、自己の責任を回避するためにそれぞれが主張する傍観者の心の弱さや、その言動がいじめを助長させていることに気付かせたいと考えた。

エ 指導に当たって

本題材においては、学習活動と生徒の変容を捉える工夫として次のような取組を行った。

- ① グループ（ペア）での話し合い活動の場面を設定し、新たな考えに気付いたり、考えを深めたり、意見を共有したりできるようにする。
- ② 意見や考えを付せん紙に記入し、類型化することで、様々な考えに触れることができるようにする。
- ③ ロールプレイを通して、登場人物の心情の理解を深めることができるようにする。
- ④ 登場人物のセリフを書き換えることで、自分の生活と関連させ、自分ならどのように考え、判断するかという価値判断をしたり、自覚化を図ったりすることができるようにする。
- ⑤ 自己評価をし、自己の姿を客観的に捉えることができるようにする。

オ 本時の実際 (1/2)

検証授業Ⅱの第一次では、展開部を四つの場面に分けて構成した(図14)。

価値の意識化の場面では、物語を読んで感想をもち、考えたい価値について意識し、価値の焦点化を図る。特に、いじめの構図について話し合う場面では、グループ(ペア)活動を行い、その判断理由を全員に伝え、お互いの考えを伝え合うという言語活動を通して、多様な考え方に触れたり、新たな気付きがあったりするように配慮した。登場人物の立場を整理し、いじめの構図を客観的に理解できるようにした。

価値の追求の場面では、ロールプレイを行うことで、また、登場人物の心情をより深く理解したり、自分のこととして考えたりすることができるように場面を設定した。

主な学習活動	ねらい	場面	観察の視点
○ ショートエクササイズ(シエンガの活用)	・ 仲間との協力 ・ 雰囲気づくり		○ 楽しく協力して活動できていたか。
○ 本時の学習について知る。「いじめが起きたとき、私にできることを考えよう」 ・ 資料から考える。 ・ 感想を発表する。	・ 登場人物の心情を想像しながら読む。 ・ 自分の考えをもつ。	価値の意識化	○ 個々が資料をどのように捉えていたか。 ○ 資料の理解はできていたか。 ○ 全体像としてのとらえる視点。 ○ 登場人物の視点、など
○ いじめの構図について話し合う。 ・ 登場人物の一人一人のせりに注目し、分類する。 ・ グループ(ペア)で活動する。	・ グループで登場人物の立場を整理する。 ・ 考え方を共有する。 ・ 判断した理由を言える。	価値の焦点化	○ 傍観者の立場に気付いていたか。 ○ いじめている人、傍観者など分類できていたか。 ○ 友達と考え方を共有できたか。
○ 資料の場面を再現して、ロールプレイをする。 ・ 役割を交代して行う。 ・ 感想を発表する。 ・ シェアリングを行う。	・ 登場人物の気持ちをより深く理解する。 ・ 自分の立場になって考える。	価値の追求	○ 役割演技を通して、心情の理解が深まったか。 ○ 自分のこととして捉えることができていたか。 ○ 友達の意見を聞いて、自分なりの考えをもっているか。
○ 周囲の人がいじめを止めない理由を考える。 ・ 付せん紙にそれぞれ記入する。	・ 心の弱さに気付く。 ・ 自分の言葉で表現する。		
○ いじめが起きたときに私にできることを考える。	・ 自分のこととして考え、日常生活に生かすための意欲をもつ。	価値の自覚化	○ 自分が考えた(判断した)理由を言うことができたか。 ○ 本時の目標に対して、自分なりの考えをもつことができていたか。

図14 検証授業Ⅱ(第一次)での指導の工夫

価値の自覚化の場面では、付せん紙を使って自分の考えを出し合う活動を取り入れ、自分なりの道徳的価値観に基づき、いじめが起きたときにどうするかということについての考えをもつことができるようにした。

視点2に関して、価値の追求及び自覚化の場面（図14の①、②）について、ビデオによる発話記録からの分析を行った（図15、16）。

教師の働き掛け	生徒の発言・反応				
	A男	B女	C女	D男	E男
	価値の追求の場面。ロールプレイを終えて、それぞれの役割を演じたあとの感想を発表するシェアリングへ。いじめられた役割を演じた、C女が感想を発表する場面から。				
○ どうでしたか？みんなが言っていたことを聞いて…。			「辛かったです」		
○ 誰が言ったことでそう思いましたか？			「みんな」		
○ いじめている人だけじゃなくて、見ている人の言ったせりふも実際辛かったということですね。					
○ 役割を変えてやってみましょう。いじめめる側は、せりふを変えてもいいですし、そのままでもいいです。					
○ 言った方はどうでしたか？					
○ Kさんのせりふだったかな。止めない方もいじめているのと同じ…ではなぜいじめを見ている人は止めないんだろう？					
○ それぞれ思ったことを付せんに書いてもらいます。自分で書いたものは、ここに（色画用紙に）貼ってください。（画用紙に貼られた言葉を整理する）→ちょっと仲間わけをします。					
	<p>役割演技を通して、傍観者もいじめているのと同じだということを感じている（心情の理解が深まった場面）</p> <p>発問に対する答えにズレがみられる。発言の意図について確認や補足が必要である</p> <p>場面（せりふ）に沿った心情の表出がみられる （BとCが次のせりふを考えて話し合っている）</p> <p>直前の役割演技での、気持ちが重なっていることが予想される</p> <p>場面に沿った心情の表出ではないが、せりふを言ったあとの素直な感情が表現されている</p>	<p>「自分のせいじゃないから関係ないやという気になった」</p> <p>（付せん紙） 「もし止めたら、自分がいじめられるかもしれない」「止めたいけど、止める勇気がでない」「自分はやっていないと思っている」「見ているとおもしろい」「自分がやめても、どうせまわりがやめないだろうと思っているから」</p>	<p>「言っている方も辛い」</p> <p>（付せん紙） 「自分もたたかれそうでごわかった」「人が傷つく」「まわりで見ている人も、いじめてる人と同じだから」</p> <p>資料からの心情理解と、自己の体験（実態調査結果から）と重ねて考えることが予想される</p>	<p>「ひどく言い過ぎた」</p> <p>（付せん紙） 「ぼくもいじめられそうでごわい」「おまえじゃあすんな！みたいになるんじゃないか。」「人がやっているのを見て、みんながやっているから、止めようとするのが難しくできなかった」</p>	<p>（言われた側の感想を話す） 「ちょっと落ち込んだ感じ…」</p> <p>（付せん紙） 「自分で見ていると言葉が出しにくいから」「自分もいじめられそう」</p>

図15 検証授業Ⅱ（第一次）での発話記録からの分析（価値の追求の場面）

教師の働き掛け	生徒の発言・反応				
	A男	B女	C女	D男	E男
<p><b>ゆさぶりに対する個々の反応</b></p> <p>○ こんなふうにはみんなは予想をしてくれました。じゃあ、いじめられている人はしょうがないか。まわりで見ていて。</p> <p>○ じゃ助けるといふ人？ じゃ、助けるといいますが、いじめが起きたときに私ができることはどんなことがあるんでしょう？・・・また、どんな気持ちをもつことが大事なんですか？</p> <p>○ みんな助けたいって言ったけど、このほかに、助けるためには何が必要？</p> <p>○ 人を思いやる気持ちだけでいいのかな？ さっき、みんなから出た意見で、止める勇気が大事なんじゃないかなというのがありました。助けてあげたいと思う優しい気持ちがあっても、助けてあげられる勇気がなければ助けられないという意見でしたね…。</p>	<p>言葉での表現はみられないが、「それでよいのが」「よいとは思わない」という身体の動き</p> <p>(何か言いたげ…)</p> <p>(首を横に振る)</p> <p>(首をかしげる)</p> <p>(何か言いたげ…)</p> <p>挙手による表現方法では、全員が一斉にいじめられている人を助けると判断</p> <p>(手を挙げる)</p> <p>(手を挙げる)</p> <p>(手を挙げる)</p> <p>(手を挙げる)</p> <p>(手を挙げる)</p> <p>表現が上手くできないが、自分な考えを一生懸命表現しようとする姿</p> <p>いじめは許さないという強い気持ちが感じられる発言</p> <p>「人を思いやる気持ち、自分がいじめられてもいいから、とにかく助けたいという積極性のある気持ち」</p> <p>「いじめられたときは先生に言いに行く」「自分はしなくてもいじめられたから…」</p> <p>「どんな気持ちをもつことが大事かというね、自分があとでいい思いをする。」 「助けてなんか…いじめられた人は、なんか…これから先いじめがなくなるんじゃないかなみたいに思うんじゃないかな。」 「自分がいじめられることを覚悟して立ち向かう」 「自信」 「はい」</p> <p>言葉での表出なし、授業後感想にて確認</p>	<p>明確に自分の言葉で表現</p> <p>「いや まずは自分が止めないと。いじめられている人を助けないと。いじめられている人からも守らないと…」</p> <p>「大切に思う気持ち」</p> <p>「あといじめられた人の気持ち」</p> <p>「わかる」</p>			

図16 検証授業Ⅱ（第一次）での発話記録からの分析（価値の自覚化の場面）

(6) 検証授業Ⅱの考察

毎時間、授業の導入部分では、限られた条件の中で協力したり、新たな気づきがあったりするようなSGEのショートエクササイズを行った。これにより、生徒はリラックスして意欲的に学習に臨むことができていた。

ア 第一次の授業記録から

グループ（ペア）学習の場面では、男子3人、女子2人のグループ（ペア）で活動を行い、活発に意見を交わしながら、登場人物を振り分ける姿が観察された（図17）。また、分類したものを発表するときに、自分たちと異なる考え方に対して、積極的に意見を述べる姿も見られた。



資料の登場人物について、いじめられている人、傍観者など、グループで分類し、話し合った結果を、全員でホワイトボード上に整理している。また、なぜそのように判断したのか、理由について、積極的に意見を交わしている様子。

図17 いじめの構図についての話合い場面

ロールプレイでは、一人一つのせりふのみの短いシーンで再現したが、その感想からは、役割を演じてみての素直な気持ち

ちを言葉で表現できており、役割演技を通して心情の理解がより深まったものと考えられる(図18)。傍観者がいじめを止めない理由を考える場面では、付せん紙を用いて、自分の考えを表現できた。特に、自らがいじめられた体験と物語の場面を結び付けて考えていることを、一人一人の記述や会話から読み取ることができた。

いじめを見たときにどうするか  
の価値判断を迫る場面では、言葉での表現はできなかった生徒も、挙手により意思表示ができた  
り、自分にできることを考えたりすることができた。また、授業後の聞き取りから、思いやりの気持ちをもつことの大切さやいじめに立ち向かう勇気をもつことの大切さなどを感じていたことが分かった。



資料のせりふを使って、場面を再現している。ロールプレイ後の話合いにおいて、それぞれの立場で、場面に沿った感想が出された。

- 自分のせいじゃないから関係ないという気になった。(傍観者役)
- いじめている人、傍観者の存在や言葉も辛かった。(いじめられる人の役)

○は生徒の発話及び感想

図18 ロールプレイから心情の理解を深める場面

イ 第二次の授業記録から

本時では、いじめられている子が元気を取り戻すストーリーへ物語を書き換える活動を、四つの場面に絞って行った。書き換えたせりふを基に、ロールプレイを行い、傍観者のせりふを優しい言葉に換えることでいじめられている人がどのように感じるかを体験させた。終末に記入した感想からは、相手を大切に思う気持ちをもつことの大切さやいじめが起きたとき、見ているだけではいけないというような気持ちなど、生徒は体験を通して感じ取っていたことが分かった。価値の自覚化を図る場面では、物語とは異なるいじめに関する場面を投げ掛け、自分ならどう判断し行動するかということを考えさせた。生徒は、第一次から物語を通して考えてきたことを、自らの価値観と重ねて考え、価値判断をしている様子が見られた。

ウ 全体を通して

特別活動の目標でもある望ましい集団活動を通して、道徳教育の視点から授業を構成した。いじめについて、傍観者の存在に目を向けて考えさせたり、学習活動の工夫をしたりすることで、自分ならどうすべきかということ、生徒はより身近な問題として考えることができた。生徒は、いじめについて考える中で、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする意欲をもち、社会生活を送る上で大切なことに気付いたり、人間としての在り方生き方についての自覚を深めたりすることができた。このことは、障害の有無に関係なく、一人一人の意識の中で、道徳性が育ってきたと言える考える。課題として、右記のように、自分の考えや心情を表現することが難しい生徒への支援を、実態に応じて更に具体的に考えておくことが必要であると考えられる。

検証授業Ⅱからみえた課題

【生徒の発表に対する補助発問を行った例】

教師： いじめをなくしていくために、どんなことが大切ですか？

生徒： ぼくは普通に過ごす。

教師： それは、相手を特別扱いするのではなく、他の人と同じよに自然に接するという意味ですか？

【ワークシート記入後の補助発問が必要な例】

教師： いじめをなくしていくために、どんなことが大切ですか？

生徒： いつも清潔にしておく。

教師： 例： 清潔にしておくことが大切だと思うのですね。どうしてそう思うのですか？

## IV 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- (1) 実態調査等から、道徳教育全体計画を実際の指導へ結び付けるための具体的な手順や方法が確立されていないことなどの課題を明らかにすることができた。
- (2) 総合単元的な道徳学習の考え方を基にして、道徳教育と各教科等を横断的に結び付けた道徳教育の進め方を明らかにすることで、知的障害特別支援学校における道徳教育の充実を図るための方法を示すことができた。
- (3) 生活単元学習や特別活動の指導において、道徳教育との関連を図り、指導内容を重点化して学習活動を工夫することで、よりよい人間関係を築いていこうとする生徒の姿や、他人と協力しつつ相手を思いやる気持ちをもとうとするなど、社会参加へつながる意欲や態度を導くことができた。
  - ア 知的障害により抽象的な事象について理解することが難しいことから、読み物資料の工夫をしたり、ICTを活用したりして、生徒にねらいを明確にもたせて考えさせることができた。
  - イ 友達と一緒に考えを伝え合ったり、聞いたり、書いたりするなどの言語活動の充実を図ることで、相互に考えを補完し合ったり、自らの考えを広げたりすることができた。
  - ウ ロールプレイなど、活動の工夫を通して、登場人物の心情の理解を深めさせることができた。

### 2 今後の課題

- (1) 知的障害特別支援学校の道徳教育の充実を図るためには、様々な指導法の改善と開発を試みることが大切である。また、多くの実践を積み重ね、生徒の実態に応じた道徳教育の在り方を追究していく必要がある。
- (2) 多様な生徒の実態に応じた指導のために、全ての教育活動において、道徳的価値を更に深く探り、年間指導計画の充実を図る必要がある。
- (3) 知的障害の程度が比較的軽い生徒に限らず、障害の程度や状態の異なる生徒それぞれに合わせた、道徳教育の在り方及び小・中・高等部一貫した教育課程の編成について検討していく必要がある。
- (4) 生徒一人一人の道徳性の発達のために、個別の指導計画との関連を明確に示すことが大切である。どのような観点で何を記載するのかなど具体的に研究していくことが必要である。
- (5) 生徒の道徳性に関する実態を、的確に捉えるための方法を明らかにする必要がある。
- (6) 生徒の心の変容を様々な方法で捉えたり、生徒自らが成長を実感し、新たな課題や目標を見つげられるような評価の方法を工夫する必要がある。

## 〈引用文献〉

- |    |              |                          |       |       |
|----|--------------|--------------------------|-------|-------|
| 1) | 文部科学省        | 『特別支援学校学習指導要領解説総則編(高等部)』 | 2009年 | 海文堂出版 |
| 2) | 永江誠司         | 『教育と脳 多重知能を生かす教育心理学』     | 2008年 | 北大路書房 |
| 3) | 押谷由夫         | 『道徳教育新時代』                | 1994年 | 国土社   |
| 4) | レイフ・クリスチャンソン | 『わたしのせいじゃないーせきになんについてー』  | 1996年 | 岩崎書店  |

## 〈参考文献〉

- |   |                  |                                       |       |         |
|---|------------------|---------------------------------------|-------|---------|
| ○ | 文部科学省            | 『特別支援学校 教育要領・学習指導要領』                  | 2009年 | 文部科学省   |
| ○ | 文部科学省            | 『特別支援学校学習指導要領解説総則編 (幼稚部・小学部・中学部)』     | 2009年 | 海文堂出版   |
| ○ | 文部科学省            | 『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』                 | 2009年 | 海文堂出版   |
| ○ | 文部科学省            | 『小学校学習指導要領解説道徳編』                      | 2008年 | 東洋館出版   |
| ○ | 文部科学省            | 『中学校学習指導要領解説道徳編』                      | 2008年 | 日本文教出版  |
| ○ | 文部科学省            | 『高等学校学習指導要領』                          | 2009年 | 文部科学省   |
| ○ | 小島 宏著            | 『各教科・領域等における道徳教育の進め方の実際』              | 2010年 | 教育出版    |
| ○ | 諸富祥彦編著           | 『道徳授業のアプローチ10』                        | 2005年 | 明治図書    |
| ○ | 押谷由夫<br>伊藤隆二編著   | 『新小学校教育課程講座 〈道徳〉』                     | 1999年 | ぎょうせい   |
| ○ | 押谷由夫序<br>笹田博之編著  | 『総合単元的道徳学習の実践』                        | 1995年 | 明治図書    |
| ○ | 本郷一夫<br>長崎 勤編    | 『特別支援教育における臨床発達心理学的アプローチ』             | 2006年 | ミネルヴァ書房 |
| ○ | 道徳教育改善<br>研究会    | 『小学校学習指導要領 ポイントと授業づくり 道徳』             | 2008年 | 東洋館出版   |
| ○ | 長崎大学教育学部附属特別支援学校 | 『自己を育む授業実践 - 「心のチェックリスト」を取り入れた授業設計- 』 | 2009年 |         |
| ○ | 東京都教職員研修センター     | 『自尊感情や自己肯定感に関する研究』                    | 2010年 |         |
| ○ | 神奈川県立総合教育センター    | 『高等学校における道徳教育の充実に向けて』                 | 2011年 |         |
| ○ | 鹿児島県総合教育センター     | 『指導資料 特別支援教育(第143～162号)』              | 2006年 |         |
| ○ | 鹿児島県教育委員会        | 『命の尊さを考える教育ー指導資料ー』                    | 2001年 |         |



長期研修者〔 染川 功次 〕

担当所員〔 上國料 里美 〕

#### 【研究の概要】

本研究は、知的障害特別支援学校における道德教育の充実を図るためには、どのような方法があるかということについて研究したものである。

具体的には、「障害の程度が比較的軽い知的障害のある生徒の生活に結び付いた道德教育の在り方」について、各教科等を横断的に結び付けた年間指導計画作成を通して、道德教育の進め方を明らかにした。実態調査等を基に、知的障害特別支援学校の道德教育についての課題を探り、総合単元的道德学習の考え方を基にして、各教科等と道德の内容項目の関連を図り、生徒の生活に結び付いた内容を、実際の場面で具体的な活動を通して指導する方法を検証した。

その結果、よりよい人間関係を築いていこうとする生徒の姿や、他人と協力しつつ相手を思いやる気持ちをもとうとするなど、生徒の社会参加へつながる意欲や態度を育むことができた。

#### 【担当所員の所見】

平成21年3月に告示された特別支援学校高等部学習指導要領において、全教師が協力して道德教育を展開するため、指導の方針や重点を明確にして、学校の教育活動全体を通じて行う道德について、その全体計画を作成することが新たに規定された。このことから、生徒の障害の多様化に対応し、個々の生徒の実態に即して、計画的に、道德性を高める指導を一層充実することが求められていると言える。

本研究では、まず、特別支援学校への実態調査及び教職員への意識調査を行い、特別支援学校における道德教育推進上の課題を明らかにしている。そして、その結果に基づき、知的障害のある生徒への道德教育推進の手順を示した。具体的には、各教科等における指導内容と道德との関連を明確にし、それらを横断的に結び付けて年間を通した指導計画を作成して、実際の授業づくりに生かせるようにした点は注目される。また、検証授業において、指導方法等を工夫しながら生徒の道德的心情等の変化を導き出したことは、知的障害のある生徒の道德教育の一方法としての有効性を示した研究であると考えられる。

今後更に実践を重ね、知的障害のある生徒の道德教育を追究し、生徒一人一人が、自分の在り方生き方について深く考える、問い掛ける教育の在り方について明らかにしていくことを期待する。